中京大学における図書館利用の推移と利用教育について

村　上　康　廣

はじめに

大学図書館は大学の教育・研究活動の発展にとって重要な役割を担っている。本学図書館はその役割を十分に果たしているという評価を得ているだろうか。これは図書館として常に問い続けるべき重要な課題である。私たちは図書館に対して寄せられるさまざまな利用者のメッセージに耳を傾け、その要望に応えることによって信頼を高め、より多くの利用者に利用されることを常に目標にしている。

今回、利用者サービス向上の前提としての図書館利用教育について考える契機となったのは、本学図書館が平成16年度東海地区協議会研究会の幹事校を務めることになったことである。この研究会の運営は前年の平成15年度より、幹事校を中心に運営委員会が組織されるようになり、本学から私が参加することになった。平成15年度は大同工大が幹事校を務め、レファレンスの事例集の作成を中心に研究会が開催され、各大学図書館のレファレンス活動の前進に大いに役立った。

平成16年度は本学のほかに７大学の図書館から運営委員が選ばれ、本学は幹事校ということで中河原室長、富増、村上の３名がこれに参加した。運営委員会は中河原室長を責任者として年間８回開催され、５回の研究会と１回の研究集会を実施した。メインテーマは「利用者の情報ニーズと図書館サービス」ということで、新入生への図書館ガイダンス（オリエンテーション）やゼミガイダンスなど図書館サービスの向上を

めざした取り組みを中心に事例発表や講演会、グループ討議をおこなった。第1回と第5回の研究会および研究集会は本学で開催したが、建設されたばかりのアネックスビルのホールや教室を使用できるという幸運に恵まれ、研究会の内容とともに会場も好評であった。また、名古屋学舎の図書館員が献身的に協力し、研究会及び研究集会の成功に貢献した。図書館は個々の図書館内部におけるチームワークと図書館間における相互協力が不可欠であるが、今回、本学が幹事校を担当したことはこの面でも有益であったと思う次第である。

一方、インターネットのめざましい普及は、図書館のあり方にも大きな影響を与えている。図書館のホームページにアクセスすれば、ウェブサイトからの迅速且つ大量の情報提供が可能になったことが、逆に来館者の減少をもたらすという否定的な状況を生み出すのではないかと危惧されている。

また、学生諸君の論文作成において、インターネットによる安易な情報収集の結果、自らの研究を深めることとは逆行するという現象が拡大したことを憂える声が教員サイドからもよく聞かれるようになった。そして、図書館に対しては、より質の高い学術情報を収集するための支援を行うことが求められ、情報リテラシー教育を推進する機関としての役割が強く期待されるようになっている。

本学図書館の利用状況の推移は次章で述べるようにそれほど悲観的な状況ではない。むしろ近年における利用状況はかなり向上している。だからといってこれに安住する訳にはいかないことは勿論である。特に大学進学希望者全入時代を間近に迎えた今、大学図書館は何処でも例外なく財政、人事などにおいて厳しい状況下に置かれている。この大学戦国時代において、本学図書館が本学の教育・研究活動の発展に貢献して行くためにはさらなる努力が必要であり、もっと多くの学生諸君に利用され、喜んでもらえる魅力的な図書館に成長していかなければならない。そのためにやらなければならないことは少なくないが、最も重視して取

り組まなければならないことの一つが図書館利用教育の充実であると思うのである。

1．利用状況の推移

利用教育の問題を検討する前提として、本学における図書館の利用状況はどうであろうか。このことについては、1996年発行の『中京大学の現状と展望』や、2001年発行の『21世紀の中京大学を創造して行くために』の中で取り上げられている。ここでは入館者数と貸出者数及び貸出冊数の推移に限定し、その後の新たなデータを追加したものを示すことによってその概略を見てみたい。

（1）入館者数の推移

15年前の1990年度から現在までの入館者数の推移は表―1の通りである。1990年度の数値と2003年度の数値を比較してみると、全体の入館者数は2.4倍に増加している。この間、奉仕対象の中心である学生の人数は1.2倍の増加であり、学生数の増加を考慮しても入館者は13年間で2倍に増加したことになる。

表－1　入館者数

年度	学生総数	名古屋	LSC	LLC	豊田	全体
1990	11,336	131,650	*	*	132,257	263,907
1992	12,168	160,275	*	*	179,966	340,241
1994	13,084	116,133	131,697	*	182,080	429,910
1995	13,130	46,792	378,924	*	167,832	593,548
1996	13,311	31,331	394,700	*	194,461	620,492
1998	13,294	28,377	368,257	40,121	236,664	673,419
2000	13,263	33,481	384,831	38,929	208,612	665,853
2001	13.377	34,306	390,467	44,532	155,265	624,570
2002	13,503	31,940	372,533	37,637	157,390	599,500
2003	13,389	33,379	407,640	41,890	154,445	637,354
2004	13,226	29,178	360,129	24,493	145,138	558,938

この間の本学図書館の内部的な事情としてあげられることは、1990年に図書館資料の電算化が始まり、1994年の10月には現在の利用者の多くを占めるライブラリーサービスセンター（LSC）がオープンし、1995年からは全館において閲覧システムが稼動を開始したことである。これらの事情が入館者数の推移に大きな影響を与えたことは明瞭である。そして、表－1に関して留意する必要があることは、1995年度にはすでに入館者数は1990年度の2倍以上になっていることである。言い換えれば、1995年度以降の入館者数はあまり大きな変動が認められないということである。

なお、豊田図書館の入館者が2000年度から2001年度にかけて大きく減少しているが、これは2000年度において、図書館の入り口に通じるブラウジングルームの利用者のカウントをやめ、閲覧室への入館者のみをカウントすることに変更したという事情によるものである。

以上のことから言えることは、電算化やLSCのオープンを主な要因として、入館者は大きく増加したものの、最近の10年間ではさほど増加していないということである。このことは次節で触れる貸出状況における変化とも関連させて検討されなければならない問題であろう。

（2）貸出状況の推移

もう一つの指標である貸出状況はどうであろうか。入館者数の場合と同様に表－2、表－3から1990年度と2003年度を比較してみると、2003年度の貸出者数は1990年度の2.85倍、貸出冊数は3.20倍の増加である。また、閲覧システムが全面的に稼動を開始した1995年度は1990年度に対して貸出者数が2.25倍、貸出冊数は2.39倍の増加である。その後2000年度までの5年間は大きな増減は見られない。ここまでは入館者数と似たような傾向だがその後顕著な変化が生まれている。特に2002年度以降はLSCを中心に貸出者数、貸出冊数ともに急激に増加している。

このような状況を生み出した要因としていくつかのことが考えられる。2000年度には学生の貸出冊数の制限を4冊から6冊にし、LSCと豊

田で土曜日の開館時間を午後０時30分から５時まで延長したこと、同年からできるだけ多くの資料を利用者の目に直接触れることができる開架に置きたいということで、LSC に配架する資料を毎年増やし、現在までに１万冊以上の所蔵資料を追加したことなどが考えられるが、最も大きい要因は文学部英文学科（現国際英語学部）の要請で講義と連動した英米文学作品のダイジェスト版（English Graded Readers）を配架したことである。これは毎月最も多く読まれる本の上位をこれらの書籍が独占し続けていることからも裏付けられる。学部の教育方針に図書館が協力するという形で始まった取り組みであるが、当該学部の学生だけでなく、他学部の学生やオープンカレッジの受講生にも読まれており、LSC の大幅な貸出増の最大要因となっている。

LSC における貸出増加とともに名古屋図書館においても2003年度より大幅な増加傾向にあり、注目される。この要因については今後分析する必要がある。また、表－１と表－２の関連で、１回における一人当たりの貸出冊数を調べてみると、1.7冊から2.1冊の間で推移していることがわかる。この枠内で貸出者数と貸出冊数は相関関係にあると言えるが、貸出の制限冊数を多くしたことがどのような影響を与えたかについては、このデータからは読み取ることが困難である。

一方、貸出増加が顕著な２館に対して、LLC は微増、豊田図書館は微減といったところである。

（３）利用状況についての要約

入館者数や貸出状況とともに相互貸借、文献複写等の相互協力業務の推移も見ておく必要があるが、ここでは資料の掲載は割愛させていただく。一言すると、2001年度以降、大幅とは言えないが毎年増加傾向にある。

これまで述べてきたことを要約すると、入館者数は1995年度に大きく増加したが、その後は大きな増減はない。貸出については1995年度に大きく増加し、その後５～６年は増減なく推移したことは入館者数の場合

表－2　貸出人数

年度	学生総数	名古屋	LSC	LLC	豊田	全体
1990	11,336	7,214	*	*	6,470	13,684
1992	12,168	8,722	*	*	7,755	16,477
1994	13,084	5,677	4,908	*	8,853	19,438
1995	13,130	2,993	15,636	*	12,180	30,809
1996	13,311	2,648	17,940	*	10,315	30,903
1998	13,294	2,117	17,564	1,093	10,299	31,073
2000	13,263	2,374	17,169	1,048	10,341	30,932
2001	13.377	1,968	18,221	1,245	9,992	31,426
2002	13,503	1,960	23,232	1,169	11,332	37,693
2003	13,389	2,134	25,145	1,468	10,308	39,055
2004	13,226	3,108	34,387	1,254	9,890	48,639

表－3　貸出冊数

年度	学生総数	名古屋	LSC	LLC	豊田	全体
1990	11,336	12,676	*	*	11,233	23,909
1992	12,168	18,231	*	*	15,218	33,449
1994	13,084	11,483	8,550	*	17,485	37,518
1995	13,130	8,368	26,388	*	22,453	57,209
1996	13,311	6,303	30,451	*	18,224	54,978
1998	13,294	4,538	29,453	1,819	18,171	55,545
2000	13,263	5,230	28,835	1,839	19,800	55,704
2001	13.377	4,381	30,875	2,089	19,134	56,479
2002	13,503	3,682	40,050	2,324	21,530	67,586
2003	13,389	4,160	44,859	2,292	19,674	76,475
2004	13,226	7,389	55,296	2,475	19,069	84,229

と同様であるが、2002年度以降は急激に増加してきたのが特徴である。そしてそれがLSC、さらには名古屋図書館で生じた現象であり、豊田図書館やLLCでは大きな変化は見られない。この要因にはまだ明確になっていない部分が存在するが、図書館利用は主体的な取り組みによってず

いぶん異なった結果が生まれることを示していると言える。さらに言えば、このことは図書館の将来を展望する上で、私たちの努力によって必ず大きな前進が期待できることを示唆していると言えよう。

2．利用教育について

利用教育については、『図書館利用教育ガイドライン－大学図書館版－』（日本図書館協会利用教育委員会編；1998年）の中で、「大学図書館の使命は、大学における教育・研究、生活、および地域貢献等の諸活動に対する情報面での支援である。その支援には、資料・情報提供サービスと、図書館利用教育の二本の柱がなければならない」と明記され、その重要性が強調されている。また「大学図書館における利用教育とは、自立した情報利用者の育成を目的として大学コミュニティの全構成員を対象に体系的・組織的に行われる情報教育を指す」と規定し、利用教育の定義を行っている。利用教育と同義に「利用者教育」、「利用指導」「利用案内」などの用語が使用されるが、ここでは『図書館利用教育ガイドライン』に従い、利用教育という用語を使用する。

近年、大学図書館は情報デジタル化の影響を受け、利用者の図書館離れが危惧されている。しかも、大学進学希望者全入時代が目前に迫っている今日、大学図書館をめぐる情勢はいろいろな意味で厳しさを増している。これを反映して各大学図書館において、大学における図書館の重要な役割を果たすために様々な努力が続けられている。

（1）東海地区私大図書館の取り組み

平成16年度私立大学図書館協会東海地区協議会研究会の幹事校として、「利用者の情報ニーズと図書館サービス」というメインテーマに沿って研究会の運営に参加する中で、最初に取り組んだことは、東海地区の大学図書館がどのように利用教育を進めているかを概略的に把握することであった。そのため、最も一般的な利用教育としての新入生オリエンテーションやゼミ単位の図書館ガイダンスの実施状況や図書館報の

発行状況等について東海地区協議会に参加するすべての大学図書館に対してアンケート調査を実施した。表－4はその集約結果の抜粋である。

各大学図書館はその大学の規模や歴史、学問分野の違い等により取り組み状況も様々である。しかし、殆どの大学図書館で新入生オリエンテーションが実施され、多くのところでゼミガイダンスが実施されてい

表－4　利用教育についてのアンケート集計

利用教育についてのアンケート集計

集計数　56（回答率　93.3%）

A．新入生オリエンテーションについて

（1）実施について

1．実施している（　50　）　　2．実施していない（　6　）

（2）対象

1．新入生全員（　42　）　　2．希望者（　7　）

（3）出席状況

1．25%未満（　2　）　　2．25～50%（　3　）

3．50～75%（　6　）　　4．75%以上（　38　）

（4）所要時間

1．30分（　29　）　　2．1時間（　13　）

3．1持間30分（　4　）

5．その他（4）…　10分(1)　20分(2)　35分(1)

B．ゼミ・ガイダンスについて

（1）実施について

1．実施している（　40　）　　2．実施していない（　16　）

C．その他の利用教育

〔1〕図書館ニュースの発行

1．発行している（　26　）　　2．発行していない（　29　）

（2）希望者への利用教育

1．図書館ツアー（　33　）　　2．情報検索講習会（　23　）

3．卒論資料の検索指導（　17　）　　4．DB利用講習会（　25　）

る。また全ての大学図書館において様々な形の利用教育が実施されており、利用教育のない大学図書館はない。

（2）本学図書館の取り組み

本学においてもさまざまな形で利用教育の取り組みを展開している。以下に2004年度の実施状況を中心に述べてみたい。

①新入生図書館ガイダンス

毎年入学式直後の学園全体のガイダンス日程の中に図書館ガイダンスとして組み込まれている。2004年度を例にとると、4月6日（火）に社会、体育、情報、生命システムの豊田学舎関係の学部、7日（水）に心理、経営、商の3学部、8日（木）に文、国際英語、法、経済の4学部という順で、基本的には学部単位で実施されている。所要時間は1時間で、図書館利用に関する説明が中心で、残りの時間で閉架書庫の見学を実施している。名古屋学舎の場合は複数学部が同じ時間帯で実施されたため、閉架書庫の見学は実施できなかった。豊田学舎の場合は情報科学と生命システムの2学部が合同であったが、3会場の時間帯が異なっており、閉架書庫の見学を実施した。また、豊田ではパワーポイントによる映像を使用して説明を行った。

表－5は過去6年間の新入生ガイダンスの出席率の推移を示したものである。2000年度は新入生ガイダンスを取りやめ、希望者を対象にした「図書館ツアー」を計画したが、参加者が非常に少なく、この年の新入生には図書館の利用に必要な事柄が殆ど伝達されていなかったため、カウンター業務担当者が利用者個々に対してその都度説明する必要が生まれ、事務の繁雑化を招くことになった。この苦い経験から翌年の2001年度には新入生ガイダンスを再開し、図書館の重要なイベントとして協力体制を強め、2002年度の出席率は75％に達した。しかし、2004年度の出席率は大きく後退し、50％に落ち込んだ。新入生ガイダンスの出席率は全体のガイダンス日程に左右されると考えられているが、このことも含め、新入生の中に図書館利用が大学生活の中でいかに重要であるかとい

う認識を深めるために図書館としての取り組みのさらなる工夫が必要である。

表－5　新入生図書館ガイダンス出席率（%）

<table>
<tr><th></th><th>1999</th><th>2000</th><th>2001</th><th>2002</th><th>2003</th><th>2004</th></tr>
<tr><td>文</td><td rowspan="3">49.6</td><td>*</td><td rowspan="3">80.4</td><td>90.0</td><td>78.0</td><td>49.5</td></tr>
<tr><td>心理</td><td>*</td><td></td><td>93.0</td><td>78.1</td></tr>
<tr><td>国際英語</td><td>*</td><td>95.0</td><td>93.0</td><td>50.5</td></tr>
<tr><td>法</td><td>41.0</td><td>*</td><td>68.0</td><td>83.0</td><td>84.0</td><td>69.6</td></tr>
<tr><td>経済</td><td>42.6</td><td>*</td><td>76.0</td><td>77.0</td><td>85.0</td><td>63.6</td></tr>
<tr><td>商</td><td>39.5</td><td>*</td><td>48.0</td><td>59.0</td><td>78.0</td><td>55.7</td></tr>
<tr><td>経営</td><td>21.4</td><td>*</td><td>41.0</td><td>51.0</td><td>48.0</td><td>44.4</td></tr>
<tr><td>社会</td><td>82.6</td><td>*</td><td>87.0</td><td>89.0</td><td>59.0</td><td>57.1</td></tr>
<tr><td>体育</td><td>57.0</td><td>*</td><td>49.0</td><td>64.0</td><td>34.0</td><td>22.2</td></tr>
<tr><td>情報</td><td>88.4</td><td>*</td><td>64.0</td><td>74.0</td><td>76.0</td><td rowspan="2">39.3</td></tr>
<tr><td>生命システム</td><td>*</td><td>*</td><td>*</td><td>*</td><td>*</td></tr>
<tr><td>全体</td><td>50.4</td><td>*</td><td>65.0</td><td>75.0</td><td>67.0</td><td>50.0</td></tr>
</table>

②ゼミガイダンス

新入生ガイダンスとともに、図書館の利用促進に直結する重要な行事はゼミ単位のガイダンスである。最近5年間のゼミガイダンス実施件数は表－6の通りである。

ゼミガイダンスの実施要領を紹介すると、まず、新年度が始まった4月の初めに表－7のような案内を全教員に配布する。図書館ガイダンスを希望するゼミの教員は申込書に実施を希望する日時や図書館に対する要望などを記入して図書館に提出する。図書館は申込書にもとづいてスケジュールを調整した上で、実施日時を決定し、ゼミ教員に報告し、了解を得る。ゼミの学生にはゼミの担当教員から集合場所など必要な事項を伝達していただき、ガイダンスの実施となる。

ゼミガイダンスの内容は学部の低学年、高学年、大学院など対象によって異なる。しかし、いずれの場合もパワーポイントによる映像を使

表－6　ゼミガイダンス実施件数

	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年
文学部	2	9	5	5	9
国際英語			5	5	0
心理学部	2	3	5	9	9
法学部	17	12	14	15	13
経済学部	5	10	10	11	10
商学部	1	5	4	5	9
経営学部	0	4	2	6	6
社会学部	5	5	8	6	6
体育学部	5	13	7	4	6
情報科学部	4	1	4	5	5
生命システム工学部	*	*	*	*	1
教養部	9	8	17	18	17
件数の合計	50	70	81	89	91
出席人数合計	810	1,106	1,320	1,387	1,454

用し、図書館の担当者による図書館利用に関する事項の説明や、OPACによる検索方法の実演がおこなわれ、その後、参加者全員が館内の端末を使って練習問題にチャレンジする。参考までに練習問題のサンプルを表－8、表－9に示す。ちなみに名古屋学舎では学部によって異なるだけでなく、担当教員ごとに異なる問題を用意している。ゼミの学生が練習問題に取り組む時は非常勤職員の協力をお願いし、ゼミの教員の指導を得ながら進めている。ゼミの教員の希望により一様ではないが、練習問題が完了した後、平素使用する機会の少ない閉架書庫の案内を実施する。以上がゼミガイダンスの概要である。

ゼミガイダンスに対する学生の反応はどうか。名古屋学舎と豊田学舎では異なる形式で学生の意見を聞いているのでまとめ方は異なるが、大体同じような感想や意見が寄せられている。表－10は名古屋学舎におけるアンケートの結果である。豊田学舎における学生の感想も、「いろん

表－7　ゼミガイダンスの案内

2004年4月

教員各位

中京大学図書館長

図書館利用ゼミガイダンスについて（ご案内）

新学年にあたり図書館では、下記の要領でゼミ履修生を対象としてゼミ単位の図書館利用ガイダンスを行います。図書資料を有効に利用するための知識や検索技術を学ぶことは有意義であると思われます。

つきましては、その趣旨をご理解のうえ、ご担当のゼミ履修生にご奨励いただきますよう、ご案内申し上げます。

※ガイダンスは春学期と秋学期の2度行います。

記

1．期間　春学期：2004年4月19日(月)から6月18日(金)まで
　　秋学期：2004年9月28日(火)から10月22日(金)まで

2．場所　・名古屋図書館会議室（収容人数30名）
　　・法学文献センター閉架学習室（収容人数30名）
　　・豊田図書館グループ学習室（収容人数20名）

3．内容　図書資料の検索方法等について

4．対象　ゼミ学生

5．申込方法　別紙申込み書にご記入の上、各館の閲覧係まで申し込んで下さい。

図書館ガイダンスについてのお問い合わせは、下記の内線番号までお願いします。

・名古屋図書館　内線2119
・法学文献センター　内線5124
・豊田図書館　内線2307

な検索方法がわかってよかった」、「今まで図書館を利用してきたが知らないことがたくさんあった」、「他の図書館や外部のデータベースの資料が検索できるのはすごい」、「閉架書庫の資料の多さに驚いた」、「今後図書館を大いに利用したい」等、名古屋と同様に肯定的な内容が殆どである。

表－８　ゼミガイダンス課題（低学年－豊田）

2004図書館ゼミガイダンス課題（低学年）

学部　　学年　氏名

OPAC で探す

中京大学図書館での次の図書の請求記号と配架場所を答えてください。

「蹴りたい背中」

「蛇にピアス」

Web Cat で探す

「お年寄りの心と体を守るために」を所蔵している他図書館は何館あるか。

「家庭という歪んだ宇宙」の著者は誰か。また近隣の大学図書館名を一館あげてください。

NICHIGAI WEB で探す

2003.11～2004.4迄に出版された「鳥インフルエンザ」関係の論文は何件あるか。

聞蔵 DNA で探す

「拉致問題」の記事で今年４月から現在までに掲載された件数は。

今年４月６日「天声人語」の記事は何か。

国立国会図書館で探す

「狂牛病」に関する図書は何件所蔵しているか。

----------切り取り----------

感想

表－9　ゼミガイダンス課題（3・4年－名古屋）

図書館ガイダンスのための資料検索練習問題　3・4年（文学部）

〈OPACで検索する〉…　中京大学図書館に所蔵しているか調べるときに

①　中京大学図書館に所蔵している、「太平記」に関する図書はどんなものがあるか調べなさい。

②　図書「私の今昔物語」の請求記号と配架場所を調べ、書庫で所在を確認しなさい。

〈Web Catで検索する〉…　図書や雑誌の書誌事項、所蔵図書館を調べるときに

③　御伽草子に関する図書で2003年に出版された図書はどんなものがあるか調べなさい。

④　著者が坪内で、2003年・富士見書房で出版された図書の書名を記しなさい。

⑤　雑誌「古典遺産」を閲覧したいが、中京大学図書館には所蔵がない。所蔵している近隣の図書館を調べなさい。

〈NICHIGAI/WEB Magazine Plusで検索する〉…　論文を調べるときに

⑥　長谷川端著「『太平記』の成立と作者」の論文を発表した雑誌名と巻号及びページ数を調べ、所蔵していれば請求記号を記し、書庫で所在を確認しなさい。

⑦　「『異本義経記』の展開とその享受」の論文を発表した著者と雑誌名を記しなさい。

〈聞蔵DNAで検索する〉…　記事を調べるときに

⑧　2004年3月5日の「天声人語」の記事の内容は何か記しなさい。

表—10　ゼミガイダンスアンケート集計（名古屋図書館、春学期）

'04図書館ガイダンスアンケート集計結果（名古屋図書館）

実施期間：平成16年４月19日から６月25日

ゼミ数：58ゼミ　828名出席

1．図書館の利用のしかたについては、わかりましたか。

ア.よくわかった	イ.わかった	ウ.だいたいわかった	エ.わからなかった
248	208	141	1

2．検索機を使っての本の探し方はわかりましたか。

ア.よくわかった	イ.わかった	ウ.だいたいわかった	エ.わからなかった
250	250	131	1

3．学生証のパスワードの変更のしかたはわかりましたか。

ア.よくわかった	イ.わかった	ウ.だいたいわかった	エ.わからなかった
189	213	142	61

4．担当者の説明は分かりやすかったですか。

ア.よくわかった	イ.わかった	ウ.だいたいわかった	エ.わからなかった
268	249	93	0

5．説明者の声は、聞き取れましたか。

ア.よく聞こえた	イ.聞こえた	ウ.ふつう	エ.聞き取れなかった
294	214	81	7

6．ガイダンスを聞いて、図書館を利用してみたいですか。

ア.ぜひ利用してみたい	イ.利用したい	ウ.利用する気はない
219	379	14

7．学部学生のみなさんにお尋ねします。

現在学部学生の閉架書庫入庫は出来ませんが、書庫に入るための利用ガイダンスが行われ、受けた人に限り自由に書庫に入る事ができるとしたら書庫を利用したいですか？

ア.利用したい	イ.利用する気はない
525	80

③広報活動

東海地区の大学図書館の約半数が図書館ニュース（館報）を発行している。館報という名称は使用しないまでも、お知らせとか新刊ニュースといった形で何らかの広報活動を実施しているし、殆どの図書館はホームページで図書館のお知らせを行っている。

本学の場合は図書館ニュース（Culib ニュース）を年４回発行している。現在までの発行は第44号を数えるが、B５版２ページから出発し、現在は８ページまで増えている。また、閲覧担当者を中心に編集体制が確立しており、内容面でも充実してきたと言える。1999年度からは図書館ホームページで公開しているが、図書館と利用者をつなぐパイプとしてできるだけ多くの利用者の目に触れるようにしたいということで2000年度からは全教職員に配布している。本学図書館の広報活動は Culib ニュースを中心に着実に向上していると言えるだろう。

④ライブラリーサロン

2004年度の新しい利用促進をめざす取り組みとしてライブラリーサロンを実施した。これは夢のある大学図書館をめざして学生、教職員の生

の声を直接聞き、利用者のニーズをより広く、より深く理解するとともに、参加した学生諸君には図書館の良さを知る機会をつくることを目的に計画された。まず６月に豊田図書館で開催し、名古屋は11月に実施した。参加者は豊田27名（学生16、院生３、教員２、研究生１、図書館員５）、名古屋31名（学生14、院生３、教員６、職員１、生協職員１、図書館員６）であった。学生の参加者からは様々な要望・意見・質問が出され、教員からは図書館にまつわる貴重な体験などが紹介された。この行事は安村館長の熱意による発案であったが、成功を収め、図書館にとって有益な催しとなった。

⑤利用教育についての要約

以上のような利用教育に加え、電子ジャーナルの普及に対応して電子ジャーナルの利用説明会も実施している。５月と11月にEBSCO host（洋雑誌のデータベース）、６月にINFO TRAC（外国新聞のデータベース）の利用説明会を名古屋、豊田で実施した。デジタル化が進む中で、図書館の利用教育の内容も変化している。その他、投書箱の設置、新着図書コーナーの充実、テーマによる資料展示なども計画している。中断している「図書館ツアー」も今後の課題であろう。

本学の場合、利用教育については相対的に進んでいると言えよう。特にゼミガイダンスにおける資料づくりでの工夫や実施体制の強化などで前進が見られる。しかし、新入生ガイダンスの出席率が低下していることや、ゼミガイダンスの実施件数も、全学のゼミ数（550超）から見ればまだ発展途上にあり、改善の余地は残されている。

３．今後の課題

本学図書館は資料の所蔵スペースの確保や閲覧席の拡充など施設・設備に関する大きな課題を抱えているが、ここでは利用教育を中心に本学図書館の今後について考えてみたい。

図書館利用の大部分を占める学部学生の図書館利用の実際やゼミガイ

ダンスの実践などを通して言えることは、小・中・高における教育の中で、図書館利用に関する指導は殆ど受けていないというのが実態である。しかし、大学においては図書館を利用しない生活は考えられないほどその必要性は高い。利用教育の重要性は改めて言うまでもない。

今後の利用教育における課題の１つは、新入生ガイダンスの出席率を高めることである。「新入生への図書館ガイダンスは希望者だけと思っていた」という新入生自身の言葉を耳にしたことがあったが、図書館は新入生全員を対象に考えており、この面では事前の広報活動にも工夫が必要であろう。またガイダンスの内容や実施方法についても改善策を模索したい。

第２の課題はゼミガイダンスの充実である。この点では特に教員との連携の強化が大切である。事前の打合わせを密に行うことにより、ガイダンスの内容や進め方の工夫をすることができるだけでなく、図書館との信頼関係も深まることが期待される。カリキュラムの中に「図書情報技術」や「情報検索入門」等の名称の講座を組み込んでいる大学もあり、今後の研究課題である。

第３の課題は推進体制と年間利用教育計画の確立である。豊田図書館では前年までゼミガイダンスの申し込みが多くなると他の係の職員の応援を依頼する場合もあったが、現在は名古屋、豊田ともに閲覧係を中心に実施している。今後、ゼミガイダンスの件数も増加を図ることが求められており、その要望に応え得る体制を整える必要がある。役職者や非常勤職員の協力を得て恒常的な利用教育チームの編成が必要ではないだろうか。同時に他の利用教育の取り組みも効率的に進めるために年間の利用教育計画を年度ごとに作成（文書化）しておくことも必要かと思う。

最後に忘れてならない重要な課題は、利用教育を推進する私たち図書館員のスキルの向上である。名古屋図書館がゼミガイダンスにおいて、個々の教員用の練習問題を作成するという肌理の細かい取り組みを実践しているが、その作業が担当館員のレファレンスや検索のスキルを高め

ることにつながっていると聞いている。ゼミガイダンスのために周到な準備をすることは利用者の情報ニーズに応え、信頼を得るだけでなく、自らのスキルの向上にもつながるという訳である。

利用教育に限られることではなく、図書館員には等しく身につけなければならない事項が存在する。2005年１月号の「図書館雑誌」のNEWS欄にテレビ朝日が放映したドラマの話が掲載されていたが、それはドラマの中で図書館員が利用者の個人情報を簡単に刑事に伝える場面があったというものであった。日本図書館協会事務局は直ちにテレビ朝日に説明を求め、テレビ朝日側が善処を約束したという内容であった。

図書館員は利用者の個人情報を守り、利用者の知る自由を保障し、著作者の権利を守るという責任を負っている。その上に、優れたレファレンサー、あるいは情報のサーチャーとしての知識や技術を習得することが求められる。図書館員はこの期待に応え、利用者から信頼されることによってこそ専門職としての認知を得られるものと思う。私自身、自戒の念を込めてさらに研修に励みたいと思う次第である。

おわりに

７年前、図書館について全く無知であった私が初めて図書館に身を置いた時、先輩の館員諸氏が当たり前のように使用する図書館用語が全く理解できず、大変なところに来てしまったと思ったものである。私は幸いにも経験豊富な先輩や、身近に相談できる多くの館員（専任、非常勤の別なく）に恵まれたことで、今日まで曲がりなりにも図書館員を続けてこられたと思っている。そんな中で、私立大学図書館協会東海地区協議会研究会の運営委員として２年間にわたり活動する機会を得た。この経験は私にとって非常に有益な研修となった。豊田図書館の館員各位には負担をかけたが、レファレンスや利用教育といった図書館の重要な活動について学ぶことが多かった。この経験を今後の図書館運営の中で生かし、その恩恵を還元していきたいと思う。折しも、本学図書館は図書

館システムを一新し、2005年度からは新システムでスタートを切ることになった。このシステム変更は資料検索その他で利用者の利便性を大きく高めるとともに、図書館事務の面でも改善が期待される。

大学図書館は今、大きな試練を迎えている。しかし、図書館は「成長する有機体」であり、それを担う私たち図書館員の努力次第で大きく進化できると思うのである。菅谷明子著『未来をつくる図書館』の中で、公共図書館の例ではあるが、約１万６千の公共図書館があるアメリカでは、年間で11億4628万人が図書館を訪れ（2000年）、インターネットが普及し始めた10年前（1990年）の２倍に利用者が増えたことが紹介されている。デジタル時代を迎えて、図書館自体が新しい情報技術を活用して情報発信型の図書館サービスを強化・発展させたことや、利用者のニーズにマッチしたさまざまなイベントを企画したことなどによるものである。デジタル化が進む中で図書館の役割はむしろ高まってきているということである。大学図書館においても同様ではないかと思う。大事なのは図書館の中にいる私たちの利用者サービスに対する姿勢ではないだろうか。

私たちも今回の図書館システムの変更を機に、気持を一新し、大学の教育・研究活動の発展に大きく貢献できる図書館、そして利用者と図書館員の双方にとって“夢のある、魅力的な図書館”にして行きたいものである。

参考文献

１．日本図書館協会図書館利用教育委員会編『書館利用教育ハンドブック（大学図書館版）』2003

２．私立大学図書館協会東地区部会研究部企画広報研究分科会編『図書館広報実践ハンドブック』2002

３．日本図書館協会図書館の自由委員会編『「図書館の自由に関する宣言1979年改定」解説』2004

4．菅谷明子『未来をつくる図書館』岩波新書、2003
5．井上真琴『図書館に訊け』ちくま新書、2004
6．B.L ホーキンス、P.バッティン『デジタル時代の大学と図書館』玉川大学出版部、2001